

平成30年1月9日

越前朝倉氏の興亡録

横浜歴史研究会 竹村紘一

出自

朝倉氏の出自は、景行天皇、孝徳天皇、開化天皇の子孫と諸説ある。

開化天皇の子孫説が有力ではあるが異説もある。いずれにせよ、天皇の子孫であると言う

ことは間違いないとされている。日下部くさかべを名乗り、但馬国養父郡やぶぐん、朝来郡あさごぐんを領地としていた。平安時代末期の宗高むねたかに至り、姓を地名の養父郡朝倉ようか（兵庫県養父市八鹿町朝倉）から取り朝倉に変えた。この地が本貫の土地であった。但馬朝倉氏から分かれ越前に移った系統が越前朝倉氏であるとされる。

越前朝倉氏は、越前国守護・斯波氏に仕えて、甲斐氏、織田氏に次ぐ斯波三守護代の第三席となり、後に、応仁の乱の際に、勇将として東軍を悩ましていた七代目孝景（英林孝景）が西軍から東軍に鞍替えしたことから、朝倉氏自体が守護に任命されるようになって自立し、越前国を支配する戦国大名になった。通字は「景」である。

朝倉氏は、宗高の嫡男・太郎大夫高清をもって朝倉氏の祖としている。高清は、源平合戦に平家側に加担し、源頼朝から領地を没収された。しかし、後に功名を挙げる機会を得て復権した。その際に、頼朝から、元来の木瓜一つの家紋に二つの木瓜を添えた家紋、三盛木瓜を貰い、以来、朝倉氏の家紋として使用された。木瓜紋は武士を始め、八坂神社も使用しており多い紋である。高清の長男の安高は八木氏、二男の信高が朝倉氏を継ぎ、三男の長高は七美氏を称した。信高の系は承久の乱に京方となったため勢力を失い、鎌倉方となった安高の系が主流となった。そして、安高の孫の高実が朝倉を称したという。この高実の子孫が、信高系の朝倉氏に代わって朝倉氏の嫡流となったのである。

尚、但馬に残った朝倉氏は但馬守護の山名氏に仕えたが戦国時代に山名氏が織田信長の侵攻により勢力を失うと歴史の彼方へ埋没したようである。

越前朝倉氏歴代当主

初代・広景

高清八代の子孫・広景の時代は、鎌倉幕府が滅び南北朝の騒乱が起こった。元弘三年（1333）4月、足利高氏が丹波国篠村で挙兵する。その際に、広景は高氏の元に参じた。広景は、足利氏の有力一門である斯波高経の母方の祖父・長井時秀（鎌倉幕府の御家人で大江一族。大江時秀とも）の被官であったことから、その縁で斯波高経軍に属した。そして、越前藤島の戦いで、新田義貞を破るなど戦功を挙げ、恩賞として、越前坂南郡黒丸城城主となり、黒丸右衛門入道と称した。その後、六代に亘って黒丸城は、朝倉氏の拠点となる。その後は仏門に入り、寺社の建設を行った。広景は、当時としては異例ともいえる

き九十八歳の長命で波瀾に満ちた生涯を閉じた。越前朝倉氏の祖である。

二代目・正景（高景）

文和四年（1335年）、京都で戦乱が起こると、正景とその子と共に東寺南大門の戦いで大いに戦功を挙げ足利尊氏から、旧名の「高」を正景に、「氏」をその子に与えた。それ以来、それぞれ、高景、氏景と名乗った。高景は、その後も尊氏に引き立てられ足羽荘預所職を任じられる。嘗て仕えた主君斯波高経が乱（貞治の変）を起こした際も、高経に従わずに幕府に従い、越前の大部分の地頭職を得た。五十九歳にて死去。

三代目・氏景

父・高景と共に京で戦功を挙げたほか、一乗谷に熊野権現を勧請した。それが、朝倉氏と一乗谷との初めての繋がりである。六十六歳で死去。

四代目・貞景

下野守を号した。七十九歳にて没。

五代目・教景

美作守を号した。永享十一年（1439年）、足利持氏による「永享の乱」の際に、将軍義教の命を受け関東に出陣した。その後、嘉吉元年（1441年）に、結城氏朝が旧主持氏の遺児を擁し幕府に反旗を翻した際に、持氏の遺児二人を生け捕るなど戦功を挙げ、義教から、「教」の字を下賜されて教景と名乗った。八十四歳で死去。

六代目・家景

為景、教景とも名乗った。下野守を号す。四十九歳で父より早く没した。以上の六代までが、越前黒丸城時代の朝倉氏である。

七代目・孝景（英林孝景の名で知られる）

教景—敏景—教景—孝景と何回も改名している

孝景の時代に一乗谷に居を移したと伝わるが異説もある。また、孝景は有名な分国法「朝倉孝景条々」を残しているが、これについても異説がある。

孝景が当主になって、二年後、主家筋の斯波氏の当主・義健が十八歳で死亡し、斯波氏の嫡流系が途絶えた。

一族の斯波義敏が後を継ぐが、重臣（後の守護代）の甲斐氏、織田氏、朝倉氏と折り合いが悪く、遂には戦闘を交えるに至る。一進一退を繰り返し、幕府の管領、遂には將軍までも巻き込んだ。義敏は、隠居に追い込まれ、息子・松王丸（後の義寛）に家督を譲るが、松王丸も追放され、将軍義政の命で足利將軍家御一家の渋川氏出身の渋川義廉が三管領筆頭の斯波武衛家を相続した。

朝倉氏は、義廉の補佐を任じられ、領所七ヶ所に守護代の地位を与えられた。しかし、大内氏の下に逃げていた義敏は、政所執事伊勢貞近の後援を得て復職する。そして、義廉を追放し、義廉に味方していた山名持豊（宗全）の切腹を將軍が命ずるまでに至る。

しかし、山名一族が、武力蜂起を決行し義敏や赤松正則ら、伊勢貞近の一派を駆逐する。こうして、義敏は、復職後一ヶ月保てずに追放され、義廉が再び越前守護に返り咲く。し

かし争いは、それでは終わらず、斯波氏に加え畠山氏の後継ぎ問題も絡み、伊勢派は、管領細川勝元を頼るなどして次第に勢力が二つに分かれて対立を深めた。応仁元年(1467年)正月八日、突如、当時の管領畠山政長に代わり、斯波義廉が管領に任命された。これは、反政長、勝元派の山名豊持、畠山義就らの工作によって為された事であった。

これに対して、畠山政長は、自邸に火を放ち、上御霊神社に陣取ったが、勇将畠山^{よしのり}義就は、政長の陣を攻め落とした。これが大戦乱応仁の乱の初戦であった。朝倉孝景は、この戦いに斯波義廉に付き、斯波義敏の父・持種の屋敷を攻め、持種一家を追い払っている。

その後、細川勝元を中心とした、細川一族、畠山政長、斯波義敏、京極持清、赤松正則、六角正高、武田信賢などの東軍と、山名持豊(宗全)を中心とした畠山義就、斯波義廉、六角高頼、一色義直らの西軍に分かれて争いが続く。

孝景は、主君義廉に従い西軍に属し、京極持清、武田信賢らと戦闘、目覚ましい戦功を挙げた。また、京都の至る所に放火して西軍の主力として働いた。六月、將軍義政が東軍に付き、弟・義視に西軍山名持豊の討伐を命じた。このため、西軍の諸将は、賊軍になるのを畏れて、東軍に投降をするものが多かった。東軍は、西軍の斯波義廉の降伏を許す条件としてその重臣朝倉孝景の首を差し出せと提示した。孝景はそれほど東軍に恐れられた勇猛果敢な西軍の有力武将であった。

しかし、長く京都で戦っているうちに、斯波義敏が、孝景の国許を攻撃し次第に蝕まれて行き、応仁二年には、孝景は息子の氏景を残して、来春三月の再上洛を約し帰国した。

国元に帰った孝景は、西軍の為にかつてのように働くでもなく、東軍へ鞍替えするよう勧誘を受ける。そして、東軍に付いたなどの噂が流れるなどしたが、旗幟を鮮明にせず、ひたすら、越前の支配に奔走する。東軍の勧誘工作の中に越前支配について、望み通り、と言う將軍義政の書類を受け取る。実際、朝倉孝景が守護になったわけではなかったが、將軍義政は実質的に朝倉氏の越前支配を認めたのであった。西軍から東軍に寝返った孝景は、西軍方の越前守護代甲斐氏と戦火を交える。文明三年(1471)翌四年の激戦を経て、甲斐氏を破って、越前の大部分を手に入れた。

しかし、甲斐氏も執拗に粘り、美濃守護代齋藤^{みょうちん}妙椿の仲裁による和睦を経て、遠江の守護代に移転することにより文明七年(1475)に漸く戦火が収まる。これにより、甲斐氏も東軍に寝返る形になるが、越前の領土は、引き続き朝倉氏が支配した。

その後は、京都での乱も下火になるが、越前では、義敏の息子・松王丸が元服し義寛と名を改めて、弟の義孝や甲斐氏を引き連れ越前北部に進入し、越前北部の諸城を攻略した。しかし、戦乱は、越前北部からは広がらず、終息に向かう。文明十三年、そんな中、甲斐氏との戦いの最中に孝景が陣没した。

天下一の極悪人、天下悪事始業の張本人とされた孝景

孝景は、公領や公家領・寺社領の押領を多く行ったため、当時の権力層である「寺社」

「公家」(寺社本所領)にとってはまさに仇敵だった。公卿の一人で前中納言だった甘露寺親長は、日記の中で孝景のことを「天下悪事始行の張本」と評している。彼の死を聞いた際には「越前の朝倉孝景が死んだということだ。朝倉孝景は「天下一の極悪人」である。あのような男が死んだことは「近年まれに見る慶事」である」とまで記している(親長卿記)。また、一条兼良も自ら越前に下って孝景と直談判して家領の足羽御厨の回復を求めたが失敗に終わり、『桃華蘂葉』の中で「言語道断也」と記している。興福寺別当の経覚は、孝景の押領に対抗するため、延暦寺に追われていた親戚の本願寺八世法主・蓮如を自領の吉崎に匿い、代官の役目を負わせつつ浄土真宗の布教を許した。これが後に朝倉氏歴代を悩ませる一向一揆の温床となった。

八代目・氏景

父の遺志を受けて甲斐氏と決戦を行い大勝した氏景は、美濃国の斎藤妙純の提案を受け入れ、足利将軍家との結びつきの強い旧主に対抗するために、嘗ては敵対関係にあった斯波義廉の子を擁立して、足利将軍家の連枝・鞍谷公方(鞍谷氏)を継がせて足利義俊と名乗らせ、名目上は越前を鞍谷公方の領国とすることで、斯波武衛家の越前守護復帰の余地を奪い、斯波義寛を破り尾張に追い払った。しかし、文明十三年(1481年)、氏景は三十八歳(二十八歳説も)の若さで死去する。

九代目・貞景

氏景の跡を継いだ嫡子の貞景は未だ若く十三歳であった。家臣団は勝手な振る舞い統制が取れなかった。長享元年(1487年)には、將軍足利^{よしひさ}義尚が、近江の六角高頼が寺社領を横領したことを理由として攻め込んで来た際には、貞景は、援軍として一族の朝倉景冬を派遣した。しかし、寺社領を横領したのは朝倉氏も同じであった。そこを、斯波義寛が、しきりに、朝倉氏の越前支配の不当性と合わせて將軍に討伐を求めるが、巧みに反論して討伐を受けることはなかった。

第二回目の六角征伐の際も、再び朝倉征伐の問題が起こり、今度は討伐令が出たが、武力を背景とした反論に遂には事なきを得て危機を乗り切った。朝倉氏の総兵力は二千人の部隊を六つ合わせた一万二千で、第一部隊には、雑兵が一人として混じってなく、精兵揃いで強力であったので甲斐氏は、討伐令が出ながらも攻めるのに二の足を踏んでいたといわれる。

文亀三年(1503年)に内乱が起こった。孝景の妾腹の子・景総(元景)と正妻の子・教景(宗滴)が起こしたものである。元景と宗滴は、貞景を主君に仰ぐのが我慢できなかったといわれる。血筋からすれば、宗滴が継ぐべきではあったが、父が死んだ時は僅か四歳であったため、家督を継げなかった。

そして、元景の娘が、朝倉景冬の息子・景豊に嫁ぎ、景豊の姉妹等が宗滴などの朝倉一族に嫁ぎ、反貞景の勢力を構築した。しかし、思わぬことに、肝心の宗滴が貞景側に寝返り、貞景は機先を制し、景豊を攻め圧勝。元景は、景豊と合流する予定であったが、果た

せず加賀に敗走し、元景はその後も越前を目指すが病没した。驚くべき宗滴の裏切りであった。宗滴は、返り忠が認められて、以後、朝倉家の為^のに尽くすのである。永正六年(1506年)越前、越中、加賀、能登の一向宗が、大挙して蜂起し、三十万を擁して加賀から越前に攻め込むが、貞景は、奮戦しそれを退けた。しかし、その後に貞景は鷹狩の最中に頓死した。享年四十歳であった。(朝倉宗滴話記)

十代目・孝景(七代目の英林孝景と区別するため宗淳孝景と呼ばれる)

曾祖父(七代)孝景にあやかって、自身も「孝景」と名乗った。孝景の時代の朝倉氏は、戦に明け暮れることになる。己の野心に囚るものではなく、將軍の命による戦ばかりであった。永正十四年6月、丹波に於いて守護一色義清と、守護代延永春信とが争った。延永が若狭守護代逸見氏を味方に引き込んだ為、若狭守護武田元信までをも巻き込んだ戦いになった。それに対して、將軍は、朝倉氏に命じて、逸見方を攻めさせた。宗滴が鎮圧に向かい乱を治めた。

その他にも、同年12月、美濃における守護と守護代の争いを將軍の命により、逃れてきた守護代を美濃に帰国させたりした。そして、大永六年に、江北の浅井亮政と近江佐々木氏嫡流の六角氏との争いが激化した。そこで孝景は、宗滴を派遣して、浅井側に加勢して六角を退けた。以後、浅井氏と朝倉氏との同盟関係は両家が滅亡するまで、揺るぐことは無かった。

孝景の代には、戦は多かったが、国内に於いては一度も戦争をすることなく、民心を得て国を安定させた。幕府の命に従った戦ばかりであったので幕府内での地位も向上し朝倉氏の勢威は挙がった。天文一七年(1548年)に孝景は急死した、五十六歳であった。

十一代目・義景

跡を継いだのは、朝倉氏最後の当主となる義景である。義景が国主になった時は、弱冠十六歳で、名も延景と名乗っていた。国内では、犬追物や、和歌などの会を行った。国外では、若狭の内乱に対して、守護武田義統に味方して執拗に若狭に兵を進めた。加賀にも兵を向けるが、その最中に、大将の座を巡り、景鏡と反目し騒動に及び、敗れた朝倉景垓が切腹するなど、一族の統率が乱れ始めた。

そして、永禄八年、將軍義輝が、松永久秀によって暗殺された。この弑逆で將軍の一族の多くが殺されるが、末弟の一乗院覚慶は生き残った。細川藤孝等によって助けられた覚慶は、以後、越前、若狭などを転々としやがて、一乗谷に入って義景に庇護される。

義秋(覚慶の還俗名)は、上洛せんとし、義景に上洛軍を興すことを求めたが、義景はそれに応ぜず、失望した義昭(義秋の元服後の名)は、明智光秀や細川藤孝等の献策を容れて美濃・尾張を手中に勢いに乗る新興の織田信長の元に行くこととなる。運命の選択であったと思われる。

以来、朝倉と織田の対立が始まる。その後は、織田との戦いに明け暮れる。元龜元年(1570

年)、敦賀まで攻め込んだ信長軍は浅井長政の突然の離反により撤兵、朝倉・浅井連合軍は姉川の合戦後、勢いを盛り返して南近江から洛中にまで侵入し優勢であったが、正親町天皇と将軍義昭の調停により信長と和議を結ぶ。裏には信長の策があったとされる。

元龜三年(1573年)7月、浅井氏救援のため兵を進めた義景は、8月14日、刀禰坂の合戦に追撃して来た信長軍に大敗、一乗谷も支えきれずに信長軍に追われ大野へ逃げたが、一族の朝倉景鏡(朝倉孝景の弟・朝倉景高の子として生まれる。朝倉義景の従弟)の裏切りにより同二十二日に大野六坊賢松寺において自害し、朝倉氏嫡流は滅亡した。

その後は、一族に繋がる子孫・宣正(父は、義景の父・孝景と戦い敗れた弟・景高)は徳川忠長に仕えて、一時は遠州掛川二万六千石を領したが、主人忠長に連座して断絶した。宣正の正室朝倉清(昌清尼。土井利勝の妹)は徳川忠直の乳母でその縁もあって宣正は忠直の御付家老となっていた。忠直改易後は義兄の土井利勝に招かれて仕えた。

余談

一乗谷

ここは元龜三年(1573)に滅びるまで朝倉家が統治し、約百年の間大変栄えた越前を中心地であった。織田信長に滅ぼされた後、功績のあった柴田勝家は両国支配の中心を一乗谷から北ノ庄に移した。焼打ちに遭った一乗谷は埋められ田んぼと化した。昭和四十二年(1967)になって、水田改良事業で掘り返したところ大量の遺跡が発掘されたことから大規模調査が始まったという。

軍記物である『朝倉始末記』には、文明三年(1471)に七代目・朝倉敏景(英林孝景・教景)が黒丸館(福井市黒丸町)から本拠を移したと記されている。しかし、「朝倉家伝記」や「朝倉家記」などの新資料によると、朝倉氏は南北朝時代には、一乗谷を本拠にしていたようである。文明年間には重臣が一乗谷に移り住むようになり、また、足利将軍家の分家である鞍谷公方(三代将軍足利義満の次男・義嗣の子・嗣俊に始まるという)等もいたことから応仁の乱により荒廃した京から、多くの公家や高僧、文人、学者たちが避難してきたため一乗谷は飛躍的に発展し、華やかな京文化が開花した。このため「北の京」とも呼ばれた。戦国四代朝倉孝景の頃から全盛期を迎え、最盛期には人口一万人を超え、越前を中心地として栄えていた。日本のポンペイとも称される。

平泉寺

中世以降比叡山延暦寺の勢力下に入り、霊応山平泉寺として知られるようになり、豊原寺と双璧をなした。白山信仰の越前側の禅定道の拠点(越前馬場)として山伏僧兵が集まるところとなった。南北朝の乱の際には、衆徒は新田義貞を裏切り足利方の斯波氏に味方し義貞敗軍の原因となった。朝倉氏の保護を受けていた室町時代後半の最盛期には、四十八社、三十六堂、六千坊、僧兵八千人の巨大な宗教都市を形成した。

戦国時代には朝倉氏と肩を並べる越前的一大勢力であったが、朝倉氏滅亡後の天正二年(1574)、一向一揆が勃発、逃れてきた朝倉景鏡(土橋信鏡と改名。義景の従弟)を匿った

為に四月、一向一揆に焼き討ちされて全山焼失した。その後、秀吉の崇敬や徳川幕府の保護により再興し明治を迎えたが、神仏分離令により寺号を捨て神社となった。

堀江 ^{としぎね}利真

(生年不詳～長禄三年)

室町時代中期の武将。妻は朝倉家景の娘(朝倉孝景の姉)。

堀江氏は利仁流河合斎藤氏の系統とされ、越前北部の番田(現あわら市)に本拠を有していた国人衆(在地領主)である。堀江宗家では代々「石見守」を名乗っており、利真もその例に倣って「石見守」と称していた。長禄二年(1458年)から始まった守護斯波義敏と守護代甲斐常治との越前支配権を懸けた合戦(長禄合戦)では、終始、守護側に与して甲斐氏や朝倉氏と対立する。

当初、利真は京都から越前に入ろうとする甲斐・朝倉連合軍を国境で押しとどめるなど、戦況を優位に進めていた。しかし、守護と守護代の対立を危惧した室町幕府が両者の和睦を調停したにもかかわらず、守護側がこれを受け入れなかったため、幕府が守護代側に肩入れするようになる。さらに守護の朝倉義敏が幕府の関東出兵命令に従わず守護代側の金ヶ崎城を攻めて敗れると形勢は守護側が不利となった。

義敏が八代将軍足利義政の怒りに触れて周防の大内教弘の元に落ちた後も引き続き利真は守護代側と対立していたが、長禄三年(1459年)8月11日、越前国足羽郡和田荘の合戦で同僚の朝倉将景・景正父子と共に甲斐・朝倉連合軍に討ち取られた。

嫡流・利真の死後、堀江氏庶流の堀江景用^{かげもち}がその名跡を継いだ。家伝によると、堀江氏は利仁流河合斎藤氏の系統であり、有力国人として鎌倉時代から越前国坂井郡河口荘堀江郷に土着し拠点としたという。また、確実な史料からは応永三年(1398年)に興福寺の配下として活動した人物として、堀江賢光の名前が見える。その後、堀江氏は興福寺から離反し、守護である斯波氏の配下として三国湊の代官などを務めるなど大きな勢力を誇るが、本家筋は長禄年間の斯波氏と守護代の甲斐氏の争いの中で没落したと推定される。傍流がその後、越前に勃興した朝倉氏に仕えることとなったと考えられている。朝倉氏の下で堀江氏は有力な国人の一人として一乗谷内にも屋敷を持ち(『一乗谷古絵図』)、坂井郡三国湊の舟奉行を勤めるなど重用されている。

長禄合戦とは

享徳元年(1452年)、斯波義健がわずか18歳で亡くなると、斯波氏の正統が絶えたため、甲斐氏・織田氏・朝倉氏の斯波氏三重臣は、斯波氏庶流の持種の子・義敏^{じゆうち ゆきひさ}を斯波氏当主として迎えるが、上記の通り、甲斐常治(将久)と持種が犬猿の仲であったため、常治が義敏と対立することになる。

対立の原因は他にもあり、甲斐氏は守護権を活用して大犯三箇条の検断権、刈田狼藉の

検断権、使節遵行権、守護請等で領国内での勢力を拡大、在地武士達との結びつきを強めていく。対して、甲斐氏によって土地から追われたり、荘園代官職を奪われたりした他の斯波氏被官人達は義敏を頼り、義敏も彼らとの繋がりによって領国支配を展開、常治の排斥を狙ったため、幕府の仲介も奏功せず対立は深まっていった。幕府が守護の支配を制限する不知行地還付政策を常治が支持したことも義敏派の不満に繋がった。

長禄2年(1458年)6月に常治が病気になると、義敏はこの機をとらえて挙兵し、守護斯波義敏(越前国人衆)と守護代甲斐常治側が激突、長禄合戦が勃発した。ただ、義敏本人は幕府から関東出兵を命ぜられて近江小野に滞在しており、常治も京都で病床にあったため、越前での合戦は守護側の堀江利真と守護代側の朝倉孝景・甲斐敏光による代理戦争の様相を呈していた。

当初、守護側は堀江利真の活躍により優勢であったが、長禄3年(1459年)になると、8代将軍足利義政は常治に肩入れするようになり、義敏本人が関東出兵の命令に背いて甲斐方の金ヶ崎城を攻めて大敗すると、これに激怒して義敏から家督を奪って周防に追放し、義敏の息子松王丸がわずか3歳で斯波氏の当主となった。幕府の常治寄りの姿勢や朝倉孝景の活躍もあって、長禄3年8月11日、長禄合戦は守護代側の勝利となるが、常治本人はその知らせを聞かないまま翌12日夜、京都で死亡した。守護代職は敏光が越前に出兵中のために、孫の千喜久丸に継承された。

朝倉孝景はこの合戦で叔父将景・景正父子らが反抗的な分家を討伐した事と、常治が死亡した事も相まって斯波氏の有力者にのし上がって行き、応仁の乱では斯波氏当主に復帰した義敏を押さえ込んで越前を平定(義政及び細川勝元から1代限りの守護権限行使の密約をもらった)、戦国大名への道を切り開いて行く。

一方、甲斐氏は事態の急展開について行けず、越前を孝景に奪われ、主家と共に衰退への道を辿っていった。

朝倉宗滴(朝倉教景)

戦国時代武将越前国の戦国大名・朝倉氏の一族重臣。諱は教景で、宗滴は法名。朝倉貞景・朝倉孝景(宗淳)・朝倉義景の三代の朝倉氏当主を一族の参謀格として良く補佐し、各地を転戦して武名を轟かせた。茶器・九十九髪茄子を所有していたことでも知られる。宗滴は貞景・孝景の時代から事実上の朝倉家の当主であった。軍事的には軍奉行として朝倉軍を率いて数々の武勲を立てて朝倉家の武威を高めると共に越前に平和を齎した。政治的にも孝景時代の出兵の大半は幕府の要請によるものでこれが朝倉家の家格上昇に繋がったのであり、越後の長尾為景や長尾景虎(上杉謙信)とも書状を交わして音信を通じるなど外交まで任されていた。この宗滴の存命中は周辺諸国も朝倉家に手出しは出来ず、朝倉家は全盛期を築いている。だが、宗滴の死で朝倉家には草創期の功臣が一人もいなくなり、また宗滴に代われるだけの器量を持った人物も朝倉家には不在であった。このため宗滴の死後、朝倉家は義景の下で一族や家臣の内紛、一向一揆衆や周辺諸国の攻撃などで衰退していくことになる。

越前朝倉氏の後裔

越前領主で織田信長のライバルであった朝倉義景の父が、孝景がたその弟に、朝倉景高がいた。戦功はあったが兄・孝景に反抗し争いに敗れて越前から逃れ、京に上り、公家衆や幕府と闘って反孝景運動を続けたが、果たせず西国に没落したとされている。

景高の子が景鏡^{かげあきら}で、一乗谷攻めに際して本家を裏切り義景を越前大野で自決させる功あり、景鏡は織田信長に降り、信長の一字を拝領して土橋信鏡と改名したが、一揆との戦いで戦没しその家系は絶えた。

景高の二男とされる在重は、父と別れて駿河今川氏を頼り、その後、中村一氏、徳川家康に仕え、その子供たちはいずれも旗本として幕府に仕えた。長男の宣正は、幕府草創期の重臣土井利勝（家康の御落胤説あり）の妹を妻とし、その妻が徳川忠長の乳母となった（朝倉局）ことから、宣正は乳母夫として駿河大納言家の付家老に出世した。

この「朝倉局」は、いわば家光の乳母「春日局」に対抗する存在であり、「秀忠の正室お江は、長男・家光が乳母・春日局にだけなつてしまったことを後悔し、二男・忠長には乳母をつけず自分で育てた」という俗説が広まっているが事実は大いに異なるのである。

「在重が、父・兄と別れて一人で駿河に下った」という話も少々怪しいため、この「駿河朝倉家」というのは遠い先祖が同じだけの別系統ではないかとの説もあるが、少なくとも幕府は「越前朝倉一族の末裔である」という待遇をしている。徳川家は、信長や秀吉が滅ぼした一族の末裔を探して存続させることをかなりやっている。徳川家の懐の深さを示す人心収攬術であったとも思われる。

駿河大納言忠長が改易されたことで朝倉宣正も責任を問われ解職されるが、後に許されて土井利勝に預けられ、子孫は旗本や土井家家臣として存続した。

主たる参考文献

大田牛一『信長記』中川太古（現代語訳）

松原信之『越前朝倉一族』（新人物往来社、2006年）

藤井正規『朝倉始末記』（勉誠社、1994年）